

法親寺新聞

2013年 秋彼岸号
手書き新聞 No.9

暑さ寒さも彼岸まで。彼岸という言葉は、私たちの日常に当たり前の様に出てきます。「彼岸」とは、小吾りの世界(極楽浄土)を意味する言葉です。極楽浄土は、西方浄土とも呼ばれ、お彼岸の中(太陽が真東から真西に沈む日)に沈む夕日の先にあります。また、秋分の日、亡き人を偲び浄土に思いを馳せる日とも言われております。

ところが、私たちは「まだ仏法を聞く歳ではない」「仏法を聞いて何になるのか？」という考えを働かせ、中々素直に浄土を受け止める事が出来ずにいます。しかし、阿彌陀如来の分け隔てない救いは、常に私達に届けられています。仏法は亡くなる直前に聞くものではありません。日々、積み重ね聴聞する事で、日々の尊さや有難さが分かり、生かされている自分に気付くのです。



Q... どうして聴聞が大切なのですか？

おしえて住職
Q&Aのコナ

A... 信心はいきなり溢れ出てくるものではなく、日々仏法に触れたり、聴聞を重ねることで、ジワジワと心に染みしてくるものです。阿彌陀様の救いを疑わず、信心を持って、素直に受け入れる気持ちを持つ人なら、必ず浄土往生できるのが浄土真宗の教えです。生きている今から自分の命が尽きたらどうなるのかを知っているからこそ、人生に充実感や安心感を持ち、毎日を明るく生きる事ができるのでないでしょうか。

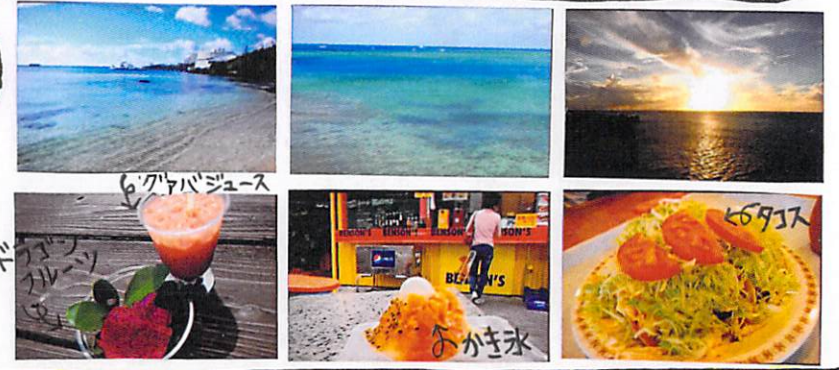
『お念仏申さずにはおれない』
「人は、この世の愛欲のきずなにつながれて生きているが、つきつめてみると、ひとり生まれ、ひとり死にひとり来てひとりゆくのである。すなわち、人それぞれの行いによって苦楽の境界(きょうがい)にすむ身になるのである。すべてには自分自身がその責任を負わねばならない。だれもこれに代わることはできないのである。」(大無量寿経)
葬儀の時、子を亡くした親が自分の命を代償に代わってやりたいと棺にすまて泣く姿に出あうことがあります。
人の死は代わりたくても世者が代わってあげることにはできません。
「買い物に出たついでに あれも買ってきて…」と頼めば代わりの買い物はできます。
「トイレに行ったついでに 私の分もすすませて…」と頼んでも代わりはできません。
トイレは代理がきかない。命にかかわる問題だからです。
死を含め命にかかわる問題は、ひとりひとりのしるべきなのです。

「ひとりゆく」私は死んだらどこに行くのでしょうか。
浄土に往生して仏様にならせていただくとおっしゃる方も、何か手放しでは喜べません。
不安と不信が混在する気持ちなのではないでしょうか。
だからその解決には、真剣に取り組まねばなりません。
お参りをし、真剣に聴聞を重ねるうちに阿彌陀様がその答えを教えて下さるのだと思います。不安と不信のわが身が、お念仏申さずにはおれない身に転ぜられていくのです。



沖縄

この夏は人生初の沖縄に行ってきました。綺麗な海と美味しい食べ物を載せました。



お知らせ



秋季永代経法座

- 日時● 平成25年10月10日(木) 午後1時～3時頃まで
- 場所● 法親寺本堂 ●講師● 住職